

第2章 静岡市における生物多様性の現状と課題

2-1. 静岡市の自然環境等の状況

1) 地域の概要

位置及び沿革

静岡県の中央に位置

本市は静岡県の中央部に位置し、その面積は約 1,412k m² と、全国 20 の指定都市の中では、浜松市に次ぐ市域を擁します（令和 3 年 3 月現在）。

また、本市は、平成 15（2003）年 4 月 1 日に旧静岡市と旧清水市が合併、また、平成 18（2006）年 3 月 31 日に旧蒲原町、平成 20（2008）年 11 月 1 日に旧由比町と合併して現在の市域となり、指定都市移行（平成 17（2005）年）にあわせ、葵区、駿河区、清水区の 3 区を設置しました。



図7 静岡市の位置と行政区

表2 静岡市の面積 (単位:k m²)

総面積	葵区	駿河区	清水区
1,411.83	1,073.75	73.06	265.02

出典:令和元年全国都道府県市区町村別面積調(国土地理院 令和元年 10 月1日時点)

地勢

市域の約 76%が森林

本市は、南アルプスから駿河湾に至る市域の中、森林が約 76%と市域の大半を占めています。

市域全体から見れば市街地*が広がる平野部*は駿河湾に面する南部のごく一部で、市域の多くは市街地の北部から南アルプスに続く急峻で広大な山地*となっています。さらに駿河湾の最大深度は約 2,500m で、南アルプスから駿河湾まで、高低差約 5,500m という地形を有する都市は、世界でも極めて珍しいものです。

安倍川の東側には、日本を代表する断層である糸魚川—静岡構造線が南北に走り、その東西では地質が大きく異なります。フォッサマグナ地帯*に続く東部の方が年代的には新しい地質となっています。



図8 静岡市の地形の概要

出典:「安倍川水系河川整備計画」(国土交通省)

山地

南アルプスは、およそ2億年から2,000万年前にかけて、海底で堆積した地層が隆起したものです。現在でも年間約4mmという日本最速レベルで隆起を続けています。



南アルプス(赤石岳)

河川

安倍川、藁科川、興津川は、日本有数の清流であり、貴重な自然を育んでいます。また、北西部には南アルプスを源とする大井川の最上流部があり、東端には日本三大急流の一つである富士川が流れています。この他、丸子川や巴川、庵原川などの河川が市街地を巡っています。



興津川

海岸

海岸線は概ね緩やかであり、海岸の多くは砂礫^{されき}※海岸となっています。海面下の傾斜が急峻なため、干潟がほとんど発達していませんが、傾斜の緩やかな富士川や巴川の河口ではわずかに見られます。また、国際拠点港湾である清水港のほか、複数の漁港を有します。



海岸線

気象

日照時間が多く、冬も暖かい

本市の気候は、温暖多雨の太平洋気候に属します。市街地（静岡地方気象台）の平年の年平均気温は17.8℃、年降水量は2,390.5mmで、日照時間は年間2,000時間を超えています。

北部の山地が北西の季節風を遮るため、特に冬期には温暖な気候を実感できます。降水量は、全域的に春から秋にかけて多く、冬には少なくなります。山地は、市街地に比べると気温が低い一方、降水量は多く、井川など標高の高い地域では積雪もみられます。

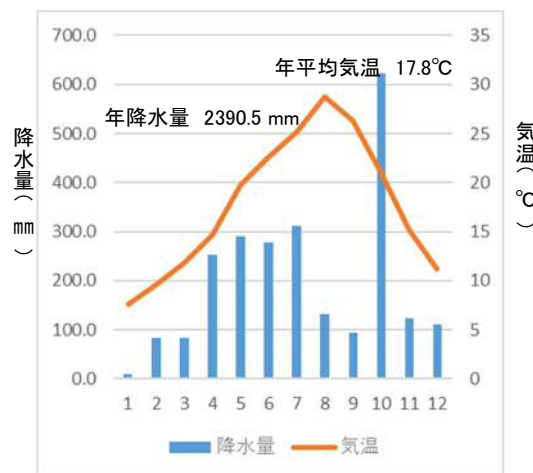


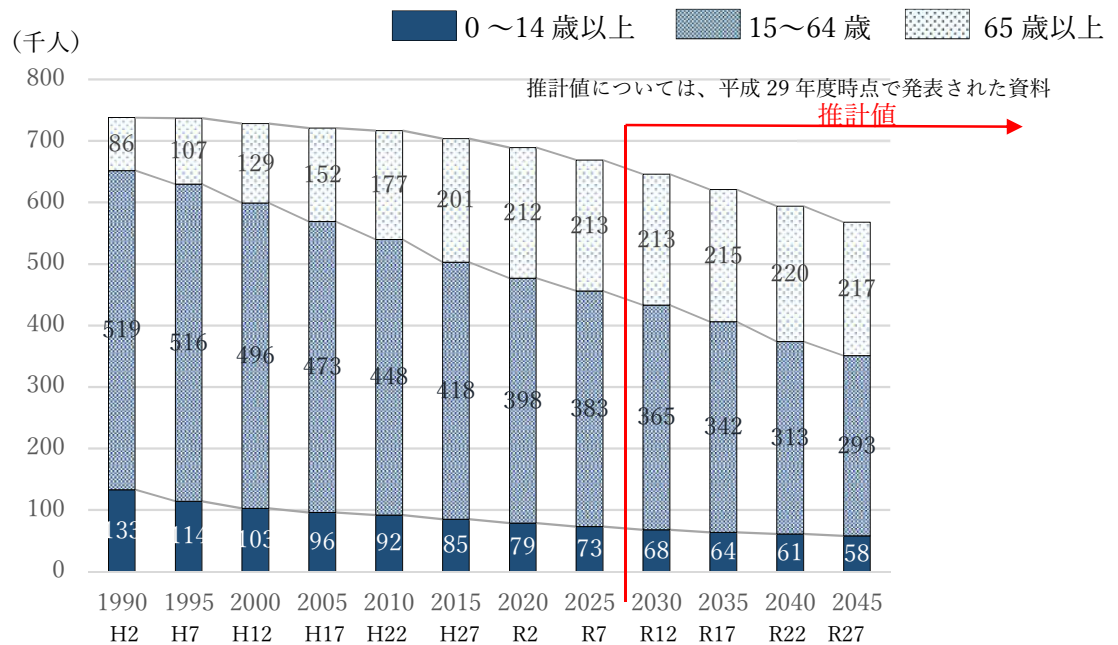
図9 静岡市の気温及び降水量の季節変化
出典:「過去の気象データ」
(2019年、静岡地方気象台)

2) 社会経済

人口・世帯数

人口減少と少子高齢化が進行

本市の人口は、平成 2（1990）年をピークに減少傾向にあり、令和 2（2020）年 12 月末現在で 694,296 人（内訳：男性：338,716 人、女性：355,580 人）です。また、年齢別の将来予測を見ると、65 歳以上の老年人口は横ばいで推移し、15 歳未満の年少人口が減少していることから、少子高齢化がより一層進むことが予想されます。また、平成 27（2015）年度時点で、夫婦がいる一般世帯のうち、共働き世帯の割合は 49.2%です（平成 27 年度国勢調査結果）。今後、若者が減少し、共働き世帯が増加することで、環境保全活動の担い手の減少も懸念されます。



※ 端数を四捨五入しているため合計数値が一致しない場合があります。

図 10 静岡市の年齢区分別将来推計
(参考: 国立社会保障・人口問題研究所資料を基に本市が作成)

土地利用

市域の大部分を占める広大な森林

市域の約 76%を森林が占めており、「森林都市」といえるほどの特徴を有しています。

表3 平成 30 年土地利用現況

	面積 (ha)	割合
市域面積	141,183	100.0%
宅地	7,335	5.2%
農用地	10,797	7.6%
森林	107,220	76.0%
その他	15,832	11.2%

出典:「静岡県の土地利用(令和元年版)」(静岡県)

産業構造

第3次産業が盛んな商業都市

本市の平成 27（2015）年時点の産業別就業者割合は、第 3 次産業従事者が 72.2%を占め、静岡県の平均 64.0%を上回り、商業都市としての特徴を表しています。

表4 産業大分類別就業者数

(単位:人)

区分	第 1 次 産 業				第 2 次 産 業				第3次産業
	計	農業	林業	漁業	計	鉱業	建設業	製造業	
静岡県	70,905	65,030	1,660	4,215	600,751	543	135,745	464,463	1,193,498
	3.8%	3.5%	0.1%	0.2%	32.2%	0.0%	7.3%	24.9%	64.0%
静岡市	9,054	8,259	288	507	88,388	55	29,427	58,906	253,410
	2.6%	2.3%	0.1%	0.2%	25.2%	0.0%	8.4%	16.8%	72.2%

出典:「平成 27 年国勢調査」(静岡県統計データベース) ※第3次産業には分類不能産業を含む。

■第 1 次産業

農業 中南部の山間地域などで展開され、お茶やみかん、石垣いちご、わさびなどが静岡市を代表する産物となっています。

林業 中山間地域の大半を占める森林の約 96%は民有林で、そのうち約 44%は人工林※です。

漁業 清水港などを拠点としてマグロの遠洋漁業のほか、駿河湾近海におけるシラス漁、サクラエビ漁などが行われています。



青島みかん
農業政策課提供

■第 2 次産業

木製家具などの伝統的な製品や、竹千筋細工など自然の産物を生かした生産に特徴があります。こうした特徴から派生したプラモデルの生産も盛んです。

プラスチックモデルキットの出荷額 170 億円

(全国の出荷額 205 億円、全国に占める割合 83%)

出典:「工業統計調査 2018」(経済産業省)



駿河竹千筋細工
産業振興課提供

■第 3 次産業

卸売業、小売業、サービス業が主であり、J R 静岡駅周辺を中心に商業都市を形成しています。

商業販売額 7 兆 829 億円(指定都市中 15 位)

出典:「2016 年経済センサス【活動調査参考資料】
産業別事務所の売上(収入)金額試算値」(総務省)



JR静岡駅
出典:「静岡市 HP」(静岡市)

このようにバランスがとれた産業構造にあり、人口規模以上に活発な経済活動がされています。

3) 自然環境から見た静岡市の歴史

(1) 先史・縄文時代

本市域では、少なくとも1万年以上前から人々が生活しており、当時の人々は、野生の動植物を求めて山野を移動していたと考えられています。

縄文時代になると、移住生活から次第に竪穴住居での定住が進み、遺跡からは、人々がシカやイノシシなどの哺乳類や魚介類を食べていたことがわかっています。また、標高の低い平地※や山地は、シイ・カシなどの照葉樹林※に覆われていたと考えられます。

人々は、川沿いや森の中を活発に移動し、小動物や木の実、果物、川や海の魚や貝などを食料として利用し、豊かな自然と共生していたものと考えられます。



市内で出土した縄文土器
出典:「静岡市 HP」(静岡市)

(2) 弥生・古墳時代

大陸からイネの栽培が伝わると、河川下流部の低湿地などに水田が拓かれ、人々は平野部にも住むようになりました。登呂遺跡は、その代表的なものです。稲作による生活の安定と、人口増加に伴い、住居や燃料のために木材を大量に利用するようになり、集落近くの照葉樹林では、次第にアカマツなどの二次林が増えていったと考えられます。



登呂遺跡
出典:「静岡市 HP」(静岡市)

(3) 律令時代

国の律令体制に合わせ、静岡地域も大和朝廷の支配下に組み入れられ、駿河の国として安倍郡などが置かれました。安倍郡から、堅魚^{かつお}の加工品や甘子^{かむし}（今のみかんの一種）を奈良の都に送った記録も残されており、既に現在に続く自然の恵みを受けた産物に恵まれていたようです。



奈良時代に創建された清見寺

(4) 平安～戦国時代

平安時代中頃から多くの荘園が設けられ、平野部は、次第に水田や畑に姿を変え、周縁の丘陵地は、薪炭の採取に活用されたと考えられます。

当時の安倍川は、現在よりも東側を流れる暴れ川で、大雨のたびに流路を変え、現在の市街地中心部や駿河区の中東部は、何度も洪水に見舞われていました。

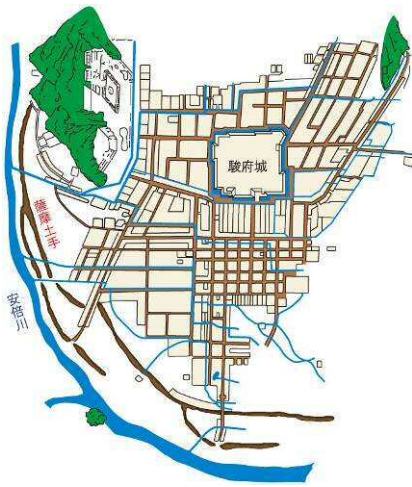


500～600 年前の安倍川流路
出典:「静岡河川事務所 HP」(国土交通省)

(5) 江戸時代

本市は、徳川家康公の治世に大きく発展します。家康公は、大規模な治水工事を行って安倍川の流路を現在の位置で安定させ、用水を引き、安倍川から十二双川や巴川を経て清水港まで水路をつなぎました。これにより水害の恐れなくなった駿府は、駿府城を中心とした城下町として大きく発展していきました。

平野部には水田や畑が広がり、中山間地でのお茶やしいたけ、わさびの栽培は、既に江戸時代から行われていました。木材や薪炭の産出のために豊富な森林資源が活用され、山地ではアワやヒエなどの焼畑[※]も行われていました。このため、コナラ・クヌギなどの二次林が増えていったと考えられます。



駿府城下町と用水網
出典:「清流スポットマップ」(静岡市)

(6) 明治以降から高度成長期まで

明治維新を経て近代に入ると、人口の増加に伴い、市街地は大きくなっていきました。山間部で栽培された茶や鮭の油詰缶は、当時の重要な輸出品で、清水港から海外へと輸出されました。地域の自然の特色を生かした農業も盛んに行われ、それに伴う農地開発も行われました。

戦後の高度成長期には、中心市街地※の各種開発が進み、特に平野部の水田や畑は減少が進みました。山地では豊富な森林資源を活かした林業が盛んで、木材生産のためのスギ・ヒノキの人工林が増加しましたが、現在では木材輸入自由化により、林業も衰退しています。

出典:「平成 31 年版わがまち静岡」(静岡市教育委員会)など



清水港のお茶の積み出し風景
出典:静岡県茶手揉保存会

2-2. 静岡市に生息・生育する生きもの

1) 静岡市の生きものの種類

静岡県における生息・生育状況

「静岡県野生生物目録 2020（2020 年 静岡県）」によると、県内には維管束植物は約 4,000 種、哺乳類、鳥類などの動物は約 9,900 種、菌類は約 1,300 種、合計約 15,200 種が生息・生育していることが確認されています。この中には、海生動物やコケ類などは含まれていませんので、実際にはもっと多くの生きものが生息・生育していると考えられます。また、「静岡県版レッドリスト」（まもりたい静岡県の野生生物 2020【植物・菌類編】、まもりたい静岡県の野生生物 2019【動物編】 静岡県）は、県内の絶滅危惧種（絶滅危惧Ⅱ類以上の「絶滅のおそれのある種」）は全部で 618 種に上るとしています。

表5 静岡県の生きものの種数および絶滅危惧種の種数

	植物	菌類	哺乳類	鳥類	爬虫類	両生類	淡水魚類	昆虫類	陸・淡水産貝類	クモ類	動物計	合計
種数	4,070	1,298	60	421	19	21	186	8,427	213	510	9,857	15,225
絶滅危惧種数	416	26	3	52	1	5	23	60	29	3	176	618

絶滅危惧種数は、静岡県版レッドリストの「絶滅のおそれのある種（絶滅危惧Ⅰ・Ⅱ類）」を記載。

出典：「静岡県野生生物目録 2020」（令和 2 年 3 月 静岡県）、「まもりたい静岡県の野生生物 2020【植物・菌類編】」（令和 2 年 3 月 静岡県）、「まもりたい静岡県の野生生物 2019【動物編】」（平成 31 年 3 月 静岡県）

静岡市における生息・生育状況

本市でも多様な自然環境を反映して多くの生きものが生息・生育し、多様な生態系が見られます。本市が実施した「いきもの散策マップ」の調査をはじめ、既存文献や様々な現地調査を基に市内の生きものの種数を整理すると、植物は約 2,800 種、動物は約 4,700 種、合計約 7,500 種の生きものが生息・生育していると推計されます。また、静岡県版レッドリストや専門家への聞き取りにより、176 種の絶滅危惧種の生息・生育が確認されています。

なお、この集計には海生動物やコケ類などが含まれておらず、また、生きものの状況は日々変化していくことから、その実態の把握が今後の課題となっています。

表6 静岡市の生きものの種数および絶滅危惧種の種数

	植物	菌類	哺乳類	鳥類	爬虫類	両生類	淡水魚類	昆虫類	陸・淡水産貝類	クモ類	動物計	合計
種数	2,794	—	48	329	20	17	98	4,002	59	145	4,718	7,512
絶滅危惧種数	89	7	3	26	1	4	8	26	7	5	80	176

※絶滅危惧種数は、静岡県版レッドデータブックの「絶滅のおそれのある種（絶滅危惧Ⅰ・Ⅱ類）」の生息生育記録が記載された地図メッシュにおいて、市内に情報のあるものを集計した（周辺市町村を含む場合がある）。また、専門家への聞き取り結果も反映した。

出典：「まもりたい静岡県の野生生物 2020【植物・菌類編】」（令和 2 年 3 月 静岡県）、「まもりたい静岡県の野生生物 2019【動物編】」（平成 31 年 3 月 静岡県）

外来種

外来種とは？

外来種とは、アライグマやオオキンケイギクなど、もともとその地域に生息・生育せず、人間の活動に伴い海外や国内のほかの地域から持ち込まれた生きものを指します。特に海外から持ち込まれた生きものを「外来生物」といいます。例えば、ミシシッピアカミミガメはアメリカ合衆国南西部、セイヨウオオマルハナバチはヨーロッパ原産の生きものです。これらは、ペットや農業資材などの目的で輸入されましたが、管理されずに野外に放たれた結果、野生化したものです。また、ヒアリやセアカゴケグモのように世界規模での交流・物流等により、予期せず侵入したものもいます。



オオキンケイギク

特定外来生物※の侵入

平成 17 (2005) 年 6 月に施行された「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律（外来生物法）」により、外来生物のうち生態系、人の生命・身体、農林水産業に被害を及ぼすもの又は及ぼすおそれのあるものを「特定外来生物」に指定することとされました。特定外来生物は、飼育、栽培、保管及び運搬することが原則禁止されています。

本市では、これまで 24 種の特定外来生物が確認されています。

表7 本市で確認された特定外来生物

区分	種名
哺乳類	アライグマ
鳥類	ソウシチョウ、ガビチョウ
爬虫類	カミツキガメ、ハナガメ
両生類	ウシガエル
魚類	オオクチバス（ブラックバス）、コクチバス、ブルーギル、ガー属、カダヤシ
昆虫類	ヒアリ、アルゼンチンアリ、アカカミアリ、アカボシゴマダラ
クモ・サソリ類	セアカゴケグモ、マダラサソリ
植物	オオキンケイギク、ナルトサワギク、アレチウリ、ナガエツルノゲイトウ、オオハンゴンソウ、オオフサモ、オオカワヂシャ

(参考) 特定外来生物 全 156 種類 (令和 2 年 12 月 31 日現在)

特定外来生物の定着・拡大

(1) セアカゴケグモ

神経毒を持つセアカゴケグモは、平成 28 (2016) 年に清水区で初めて確認され、平成 30 (2018) 年以降、市内の一部地域で生息域を拡大しています。建築資材や自動車への付着により、他地域への拡散が懸念されます。



セアカゴケグモ

(2) カミツキガメ

平成 26 (2014) 年に葵区で初めて確認され、年々捕獲数が増加しており、令和 2 (2020) 年度までに 10 匹が捕獲されています。カミツキガメの増殖に伴い、在来種の捕食や、生態系のかく乱及び人体への被害が懸念されます。



カミツキガメ

(3) アライグマ

平成 16 (2004) 年に市内で初めて発見され、地域の協力のもと捕獲を進めていますが、すでに市内の一部地域での定着が進んでおり、さらに生息域が拡大するおそれがあります。



アライグマ



アライグマの生息域

令和元 (2019) 年9月から 12 月まで、アライグマの生息状況の確認を目的として、自動撮影カメラによる調査を実施しました。

その結果、アライグマが撮影された場所 (赤い点) に着目すると、東部地区で生息が確認されていることが分かります。

特に、人里に近いところに生息しており、農作物や市民生活への影響が懸念されます。

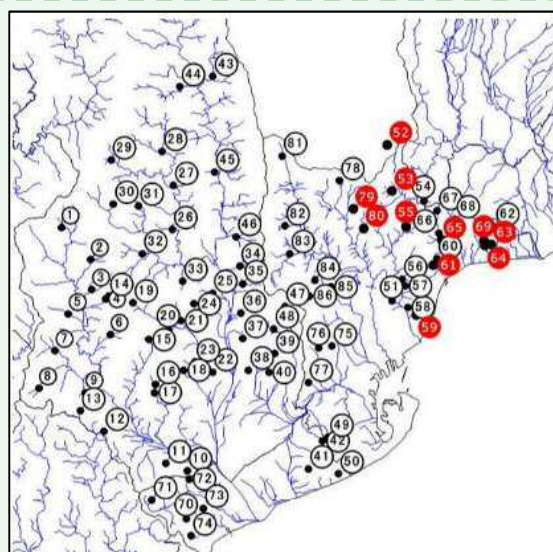


図 11 アライグマが撮影された場所
令和元年「アライグマ生息域調査」を基に作成

このように、一部の特定外来生物は、すでに市内に定着しているものと考えられます。

加えて、隣接している市町から、タイワンリスやクビアカツヤカミキリなど新たな特定外来生物の侵入も懸念されます。

特定外来生物の生息域拡大は、地域の農作物などに被害を与えるばかりではなく、在来種との競争により地域の生態系をかく乱することが懸念されます。外来種対策は、生物多様性の保全を図る上で重要な問題であり、啓発活動と継続的な調査や防除が必要です。

有害鳥獣

有害鳥獣による被害の現状

農林業従事者の減少や資源利用の変化による里地里山の荒廃により、農地や民家に野生動物が近づきやすくなっています。

本市でも、イノシシやサル、ニホンジカ、ハクビシン、アライグマによる農作物の被害が発生しています。各種農林産物の食害、茶園やミカン畑の掘り起こしによる被害が深刻で、平成 29（2017）年度の被害額は約 7,600 万円に上ります。

こうした状況に対して、本市では「静岡市鳥獣被害防止計画」を策定し、野生鳥獣対策の取組を進めています。

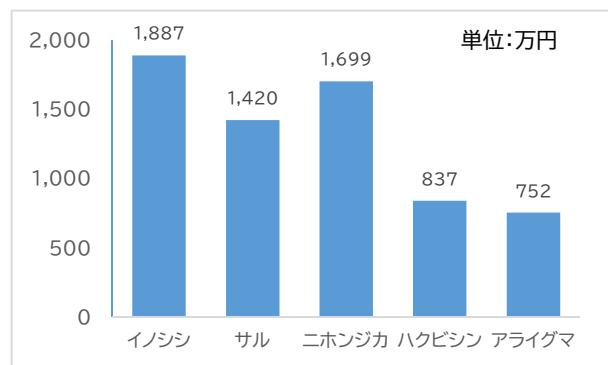


図 12 鳥獣による被害金額(平成 28 年度)
「静岡市鳥獣被害防止計画」(平成 30 年度)を基に作成

有害鳥獣の捕獲

地域一体での捕獲の強化によって、特にイノシシは、平成 25（2013）年度以降の捕獲頭数が増加傾向にあります。

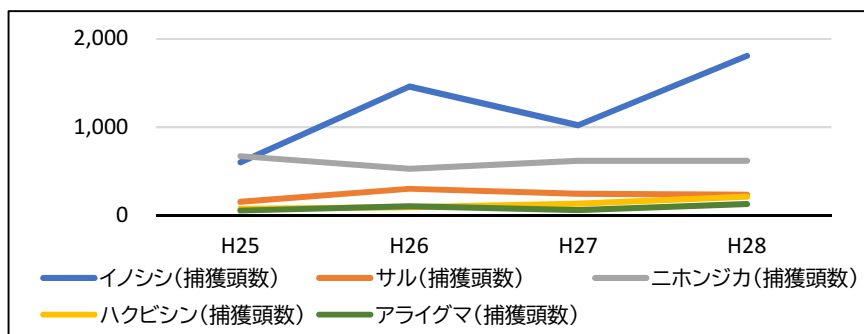


図 13 有害鳥獣の捕獲頭数
「静岡市鳥獣被害防止計画」を基に作成



イノシシ



ニホンジカ

有害鳥獣への対応

狩猟や有害鳥獣捕獲の中心を担う猟友会の会員数は減少しており、後継者不足などによる今後の駆除活動の継続性が懸念されています。

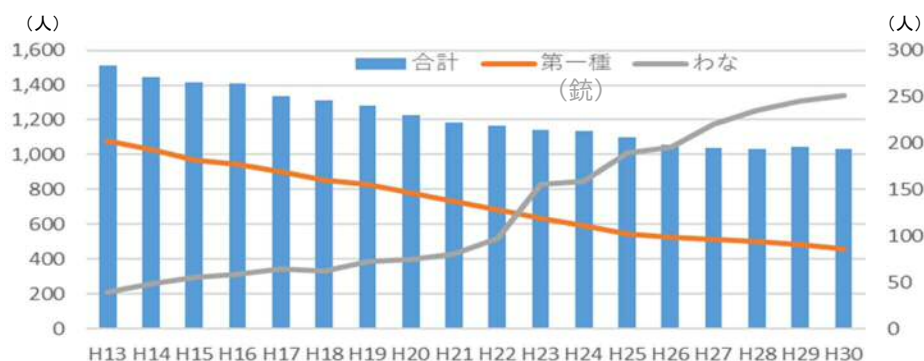


図 14 猟友会構成員数
静岡県猟友会提供資料「構成員数」を基に作成

里地里山の生態系

里地里山とは

環境省による「里地里山」の定義は、次のとおりです。

里地里山は、集落を取り巻く農地、ため池、二次林と人工林、草原などで構成される地域であり、相対的に自然性の高い奥山自然地域と人間活動が集中する都市地域※との中間に位置しています。

(環境省里地里山保全活用行動計画)

里地里山は、先人たちが長い歴史の中で、農業や林業などの営みを通じ、自然と関わることによって形作られ、維持されてきました。水田や畑、雑木林などは、定期的に人の手が加わることで、多様な生きものの生息環境が形成され、生きものの生息の場となっていました。このような里地里山の環境は、生物多様性を支える上でも重要な地域といえます。



里地里山

里地里山の現状

過疎化・高齢化による担い手の減少や農林業を取り巻く厳しい状況などから、耕作放棄地※や手入れの行き届かなくなった二次林が増加しています。

平成 27 (2015) 年の農林業センサスによると、本市の耕作放棄地の総面積は 1,868ha で、5 年前と比べると 11.6%減少しているものの、依然として広大な耕作放棄地が存在しています。耕作放棄地が有害鳥獣の住処になるなど、周辺の農地に悪影響を及ぼし、農業者の営農意欲を減衰させ、さらなる耕作放棄地増加の一因となるといった悪循環も指摘されています。

このように荒廃した里地里山の増加により、ある特定の種が他の動植物を淘汰し、生態系が破壊されてしまうといった影響も出ています。

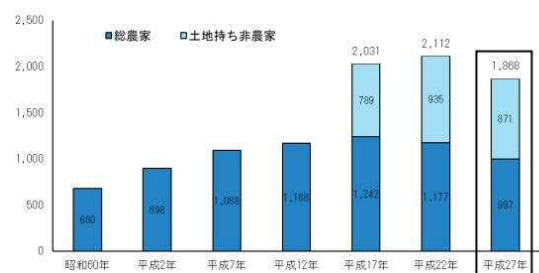


図 15 静岡市の耕作放棄地の推移

出典:農林水産省「農林業センサス」を基に作成



耕作放棄地

放任竹林の現状

竹林は、清水区を中心に多くの地域で造成されましたが、近年はプラスチック製品の普及、海外からの安価な竹材やタケノコの輸入等の影響により、放置されたままの竹林が増加しています。手入れが行き届かず、伸び放題になった竹林の増加は、様々な問題を引き起こします。

一つ目は、生物多様性の低下です。竹は、地下茎を伸ばすことで急速にその分布を拡大し、大型の竹はわずか2～3か月で高さ20mにもなります。それらが過密になった竹林の下では、陽光不足などにより生育できる植物が限られてしまうため、植物やそこに生息する昆虫・鳥類などの動物種が減り、生物多様性が低下することにつながります。

二つ目は、災害の危険性の増加です。過密になった竹林の地下茎は弱く、枯死したものも多くなり、浅根になる傾向もあります。このような地下茎では土を抱え止めることができず、土砂崩れなどの災害の危険性が増す可能性があります。

このように、放置された竹林が無秩序に拡大することは、生物多様性を低下させるだけでなく、防災面からも好ましくありません。

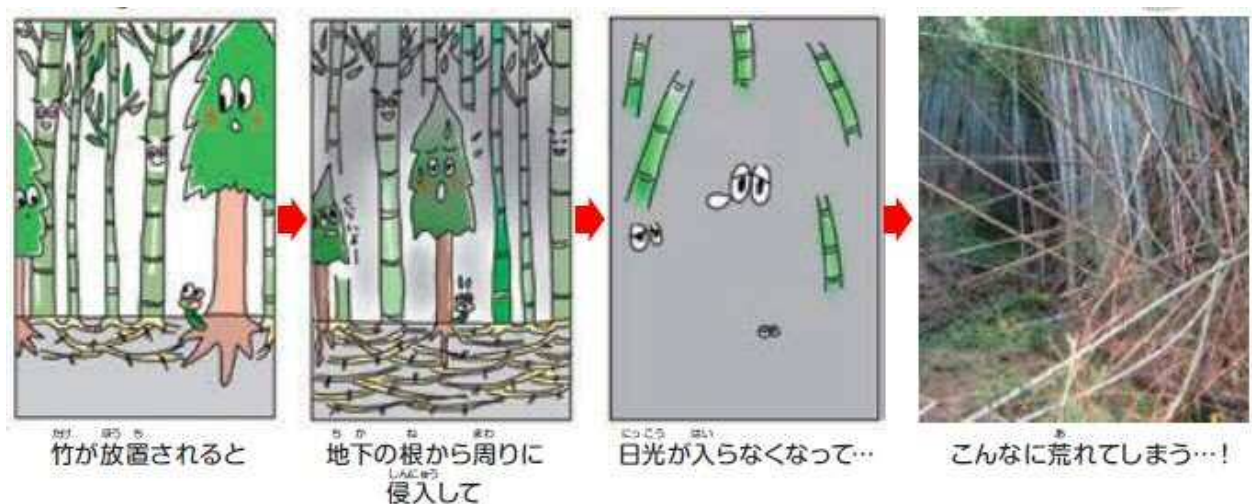


図 16 放任竹林の流れ

出典：静岡市「里地・里山ってどんなところ？」

本市の竹林面積は、拡大傾向にあります。竹林の増加は、森林資源の利活用の低下に伴う森林の管理不足が一因とも言われることから、里地里山の保全と竹林には深い関係があります。モウソウチクとマダケは、地球温暖化の進行とともに、その生育に適した環境の拡大が予測され、里山における生態系・生物多様性への脅威として、今後ますます対策が必要となっています。

里地里山などを管理する担い手

本市には、地域の里地里山を保全するために活動する市民活動団体*が多数存在しています。里山荒廃についての危機意識のもと、放任竹林の伐採や、苗木の植栽、イベントを通じた市民への周知活動など、積極的に里地里山に関わる活動が行われています。

一方で、多くの団体で新たな担い手の不足により、活動の継続性が不安視されています。また、所有者不明の土地の問題は、里山管理の活動の大きな障壁となっています。土地の相続により、所有土地に対する管理意識が希薄化し、団体の活動に協力を求めることも困難となってきました。

このようなことも、里地里山の整備を進められないことの一因となっています。



オクシズ「漆の里」プロジェクト

しりたがりかわせみ リーダー
(「しぜんたんけんてちょう」キャラクター)



オクシズ「漆の里」プロジェクトは、オクシズでウルシの木を育て、静岡浅間神社や久能山東照宮に伝わる総漆塗りの文化財建造物や、駿河漆器や井川メンパなどの伝統工芸を守り伝え、漆の地産地消を目指す取組です。

漆は縄文時代から塗料や接着剤として利用されてきましたが、食用や、環境に優しい素材として活用できる可能性を秘めており、新たな産業としての展開も期待できます。

林業・伝統工芸・文化財・行政など、様々な分野の関係者で構成された「オクシズ『漆の里』協議会」を中心に、「静岡の漆文化—Shizuoka japan—」を世界に発信していくため、プロジェクトは日々進行中です！

オクシズ「漆の里」協議会
(Facebook) @okushizuurushinosato



静岡浅間神社 楼門



オクシズでの植樹作業

提供:オクシズ「漆の里」協議会



竹あかり灯す アカリノワ（放任竹林解消の取組事例）

■活動の背景・経緯

「アカリノワ」の活動拠点は、静岡市葵区の麻機地区で、放任竹林の解消に向け、多様な主体と連携して竹林伐採に取り組むとともに、伐採した竹を地域資源として有効に活用することで、豊かな自然環境を未来の世代へ継承していくための様々な取組を行っています。

初めは、自然を体感できる「里地・里山体験」をきっかけに、子ども達に対し放任竹林問題を通じた自然環境の保全に対する意識の醸成と、地域に対する愛着を育む活動を行いました。その後、地域から市域、他都市へと活動の輪を広げていきました。

■地域資源の活用

伐採した竹を地域資源として活用するため、竹灯籠を制作し、イベントなどで展示することで、幻想的な空間を演出し新たな魅力づくりの一つとして役立てています。また、展示後は竹灯籠を竹炭にして二酸化炭素を固定化するとともに、田畑の肥料として活用することで土壌改良にも役立てています。



静岡浅間神社の竹灯籠

■活動の成果

地域の声から始めた活動であり、活動当初はイベント参加者も100人を超える程度でしたが、令和元(2019)年度には12,000人以上もの集客のあるイベントに携わるようになりました。

また、地域の新たな魅力も創出してきました。日本夜景遺産に認定された日本平では、夜景を楽しむのと同時に、竹灯籠の幻想的な世界を演出し、来訪者は非日常を味わうことができました。



日本平でのイベント風景

加えて、国宝久能山東照宮では、「天下泰平の竹あかり」と銘打ち、制作した竹灯籠を展示することにより、国宝久能山東照宮の新たな魅力発信にもつなげました。

これらの取組が評価され、国土交通省主催「地域づくり表彰」（令和2（2020）年）において、全国地域づくり推進協議会会長賞を受賞しました。

■課題と展望

最優先の課題は、竹あかり職人の育成です。伐採～加工～設置までを担うため、現場に応じた対応能力が求められます。

また、「土に返す」までがアカリノワの竹あかりのため、自然界の循環作用まで網羅していく必要があります。今後は、SDGsも踏まえ、放任竹林問題にとどまらず、水素を活用した「水素で灯す竹あかり」を実施するなど多角的な取組も行っていきます。



「アカリノワ」スタッフの活動の様子

今後も、竹あかり循環の一部でもある炭作り、野菜作りなどの体験を通し、あらゆる分野で生産・創造できる豊かな人材を育ていける環境を作っていきます。

2) 静岡市の生きものの地域別生息・生育状況

山岳・森林地域※

二次林や人工林が多い

本市の面積は 141,183ha で、そのうち森林面積（南アルプスの高山帯や無立木地も含む。）は約 107,220ha で、市域の約 76%を占めています。これらの森林のうち、大井川上流部や安倍川上流域の稜線部※などではシラベ林、モミ・ツガ林、ブナ林などの自然林（人の手があまり加わっていない天然林）が見られますが、その他の地域は、かつて薪炭づくりや焼畑などで伐採された森林が再生した二次林や人工林で占められています。

森林のうち、96%が民有林

森林の多くが民有林である一方、安倍峠や山伏周辺の安倍川最上流部、真富士山の稜線部などに 4,263ha の国有林があります。民有林のうち、県有林は静岡県県民の森などに 1,845ha、私有林は 95,832ha あり、民有林のほとんどを私有林が占めています。また、市内各地に点在する計 1,755ha の市有林には主なものとして、竜爪山文珠岳頂上付近、山伏や笹山^{やんぶし}周辺、ダイラボウ、安倍城跡、千代みどりの森、高山市民の森などがあります。

表8 静岡市の森林面積

(単位：ha)

全域面積	森林面積			森林率
	総面積	民有林 (県・市・財産区・私有林)	国有林	
141,183	107,220	102,957	4,263	76%

出典：令和元年度版静岡県森林・林業統計要覧

山岳・森林地域を次の3つに分類

本地域戦略では、市内の山岳・森林地域を次の3つに分類します。

① 南アルプス高山地域

南アルプスの稜線部で、森林限界※より上の高山帯を「南アルプス高山地域」とします。

② 奥山地域

主として自然林が分布する森林地帯※を「奥山地域」とします。

③ 山間地域

①②を除く、薪炭用の木材の定期的な伐採や焼畑などにより形成されたコナラなどの二次林や、スギ・ヒノキなどの人工林を主体とする森林地帯を「山間地域」とします。

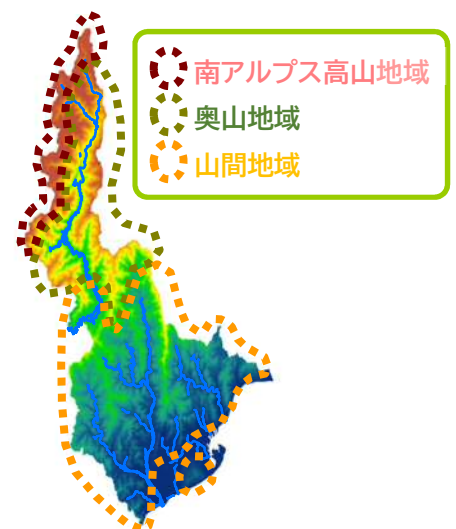


図 17 山岳・森林地域の区分

出典：静岡市都市計画 ASP システムデータ(静岡市)
注：ここでは、各地域が分布する大まかな場所を示しています。

① 南アルプス高山地域

南アルプスは、標高 3,193m の北岳を最高峰とする日本有数の山岳地帯です。すぐれた山岳景観を呈しているとともに、お花畑やハイマツ群落などの高山植生が分布しています。

大規模な高山帯としては、東アジア最南部に位置し、カール※などの氷河地形※などとあいまって、世界的にも大変貴重なものであり、周辺自治体との協力・取組により、平成 26（2014）年にはユネスコエコパークに登録されました。また、長野県との県境の稜線部は南アルプス国立公園にも指定され、厳格な保全が図られています。



南アルプス



自然草原であるお花畑やハイマツ群落など高山植生が分布しています。ムカゴユキノシタやタカネマンテマ、タカネビランジなど、南アルプス固有種や日本の生育南限種で、かつ氷河期に北極域から分布を広げた周北極要素※の希少な植物が多数生育しています。

しかし近年、高山地帯においてニホンジカの生息域が拡大し、高山植物の食害などの問題が起きています。



タカネビランジ



ハイマツ帯などでは氷河期の遺存種※といわれるライチョウが通年生息し、世界の生息南限地※となっています。しかし、気候変動によりライチョウの営巣に必要なハイマツの生育域が減少することで、ライチョウの生息環境の悪化が懸念されています。

また、高山蝶と呼ばれるベニヒカゲ、クモマベニヒカゲなどの昆虫類も生息しています。哺乳類では亜高山帯にかけてホンドオコジョ、アズミトガリネズミが生息しています。



ライチョウ



南アルプスユネスコエコパーク

■ユネスコエコパークとは

ユネスコエコパークとは、生態系の保全と持続可能な利活用の調和（自然と人間社会の共生）を目的として、ユネスコが開始した事業です。ユネスコエコパークは、生物圏保存地域（BR：Biosphere Reserves）とも呼ばれ、これまで、124 か国、701 地域が登録されており、日本では 10 地域（志賀高原、白山、大台ヶ原・大峯山・大杉谷、屋久島・口永良部島、綾、只見、南アルプス、祖母・傾・大崩、みなかみ、甲武信）が登録されています（令和元年7月現在）。

■ユネスコエコパークの3つの機能

ユネスコエコパークには3つの機能があります。3つの機能はお互いに影響し合い、それぞれの機能が強化されていきます。

①生物多様性の保全 ②学術的研究支援 ③経済と社会の発展

■ユネスコエコパークの3つの地域

上記機能を果たすため、3つの地域を設定しています。

【核心地域】

貴重な自然環境があり、最も厳しく長期的に保全する地域

【緩衝地域】

環境教育、調査研究やエコツーリズムなどに利用できる地域

【移行地域】

人が生活し、自然と調和した持続可能な発展を実現する地域



南アルプスユネスコエコパークの3つの地域

■南アルプスユネスコエコパーク

静岡市の最北に位置する南アルプスは、静岡、山梨、長野の3県 10 市町村に跨り、3,000m 級の山々を有する日本有数の山岳地帯として、豊かな自然環境を育み、その恵みを井川地域だけでなく、市内全体に与える、自然、人、文化、経済の源です。

平成 26（2014）年6月、南アルプスの自然環境と共に歩んできた地域の歴史・文化などが世界に認められ、ユネスコエコパークに登録されました。南アルプスユネスコエコパークでは関係する 10 市町村が連携して人と自然が共生できる地域の持続可能な発展を目指しています。

●関連施設「南アルプスユネスコエコパーク井川自然の家」

南アルプスユネスコエコパーク井川自然の家は、主に青少年が自然に親しみながら、人と自然の関わり合いについて考えたり、集団宿泊体験を通して、たくましさや協調性などを育んだりする社会教育施設です。

また、南アルプスユネスコエコパークの教育拠点として、その理念の普及を中心に、人材の育成、主催事業等での井川の地域資源の活用を担っています。

令和 2（2020）年度には、新館宿泊棟に家族・小グループ向けの個室を新設し、少人数でも利用しやすい施設となりました。



南アルプスユネスコエコパーク
井川自然の家(葵区井川)

② 奥山地域

高山帯につながる地域で、上部にはコメツガなどの亜高山帯針葉樹林、下部にはブナ・ミズナラ林やウラジロモミ・ツガが混交する冷温帯落葉広葉樹林が分布しています。

大井川最上流部の民有林では、古くからシラビソ、ツガ、トウヒ、ヒノキ、カラマツなどの伐採が行われてきたため、原生林はあまり見られません。大無間山や山伏の稜線部、大井川溪谷一帯は、奥大井県立自然公園に指定されています。



ミズナラを主とした針広混交林
出典：「静岡市南アルプス森林植生
クライテリア把握調査」



天然のヒノキやカラマツ、サワグルミ林、アカシデ・イヌシデ林などが分布しています。

大井川上流部の樫島ではクロソゴ群落、二軒小屋ではレンプクソウなどの希少な植物が生育しています。安倍峠周辺では、オオイタヤメイゲツ林、シロヤシオ群落など貴重な植生が見られます。



サワグルミ林
出典：「静岡市南アルプス森林植生
クライテリア把握調査」



国の特別天然記念物であるニホンカモシカをはじめ、ニホンジカ、ツキノワグマなどの中大型哺乳類やモモンガ、ヤマネ、希少なコウモリ類などが生息しています。夏鳥のコルリやセンダイムシクイ、留鳥のアカゲラ、カケスオオルリ、キビタキなど多くの森林性の鳥類をはじめ、ワシタカ類の生息も確認されています。クモマツマキチョウやキベリカタビロハナカミキリなどの昆虫類、アカイシサンショウウオやヒダサンショウウオなどの希少な両生類も生息しています。



ニホンカモシカ



コラム

しりたがりかわせみ リーダー
(「しぜんたんけんてちょう」キャラクター)



静岡県県民の森

静岡県県民の森は、県政 100 年を記念して整備された野外レクリエーション施設で、静岡市北部の井川・梅ヶ島地区にまたがる尾根沿いの約 1,000ha の地域です。勘行峰・笹山・山伏岳の山々とともに、温帯性の美しい森林に覆われ、井川湖・南アルプス・富士山を望むことのできる景色の美しいところで、奥大井県立自然公園に指定されています。

キャンプ場などの施設は、富士見峠から約 9km、豊かな大自然の懷にあります。



静岡県県民の森（葵区岩崎）
出典：HP「南アルプス de 深呼吸 南プス」

③ 山間地域

安倍川、藁科川、興津川の流域では、集落が上流域にまで点在し、集落を囲むようにミズナラ、コナラ、クヌギなどの二次林が標高の高い場所にまで見られるものの、大半はスギやヒノキなどの人工林となっています。

都市地域に位置する有度山では人工林や二次林が発達し、久能山には市内最大級の照葉樹林が生育しています。手入れ・管理が行き届いた清水森林公園、高山・市民の森、遊木の森などの森林は、自然との触れ合いや憩いの場として活用されています。



スギ・ヒノキの人工林では、生育する植物は少ないものの、コナラ・クヌギなどの二次林では多様な植物が生育しています。希少種は多くありませんが、竜爪山山頂付近ではチャボホトトギス、ミツバテンナンショウなどが生育しています。また、キスミレの自生地も見られます。道路沿いなどでは、外来種が生育域を拡大しています。



イノシシ、ニホンジカ、ホンドギツネ、タヌキ、アナグマ、ノウサギなどの哺乳類をはじめ、メジロキビタキやウグイスなど多くの森林性の鳥類が生息します。

オオムラサキやミスジチョウ、クワガタムシ類などをはじめとする昆虫類、タゴガエルやヤマアカガエル等の両生類など、馴染みのある生きものを見ることができます。また、シロマダラやタカチホヘビ、ジムグリなど、珍しい爬虫類も生息しています。



高山・市民の森



チャボホトトギス
撮影:伴野正志



ニホンジカ



高山・市民の森

「高山・市民の森」は、「散策の森」や「遊びの森」などにゾーンわけされており、四季折々の自然にふれながら、目的に合わせて楽しむことができます。

ハイキングや森林浴、バードウォッチングなど、様々な過ごし方を楽しみながら、樹木や草花、生きものや森林のことを知ることができます。5月下旬の高山の池周辺では、モリアオガエルの産卵が観察できます。



高山・市民の森(葵区水見色)

<様々なゾーン(一例)>



「遊びの森」



「星の展望台からの眺望」



「高山の池」

高山・市民の森

検索

出典:HP「静岡市 高山・市民の森」

農業地域※

平野部では、主に市街地周辺部に分布する農地での野菜促成栽培などが盛んです。南部の海岸地帯では、冬期の豊富な日照を生かしたいちご、野菜の促成栽培などの施設園芸が盛んです。山間地域の日当たりのよい斜面では、お茶やみかんの栽培が盛んで、水質のよい清流では、わさびが栽培されています。規模の大きな水田地帯は、巴川流域の麻機遊水地周辺などに見られます。

水田や水路はカエル類や魚類などの水生動物の生息場所として、また、水生・湿生植物の生育場所として、池沼が少ない本市の中では貴重な役割を有していると言えます。



人の手が加わった地域であり、水田や畑、茶畑、みかんの果樹園などでは、栽培種や耕作形態に応じた生態系が形成されています。水田の畔ではミゾコウジュ、茶畑の周辺ではアマナといった希少な植物を見ることができます。

しかし、農業地域ではヒメジョオンやアメリカセンダングサなどの外来種も多く見られ、近年ではホシアサガオなどの外来のアサガオ類がはびこり、農作業に影響を与えています。



市街地周辺の農地



ホンドギツネ、タヌキなどの哺乳類や、ツバメ、ヒヨドリ、ムクドリなどの身近なものから、サギ類、タマシギ、ヒクイナのような水田などの湿地を主な生息地にする鳥が見られます。また、希少種としても知られる猛禽類のサシバなども市街地周縁部では見ることができます。水田では、ニホンアカガエルやツチガエル、トノサマガエルなどの両生類や、シマヘビやヤマカガシ、ニホンイシガメなどの爬虫類も生息しています。外来種であるハクビシンが農業地域や山間地域を中心とした広い範囲に生息し、近年では特定外来生物であるアライグマも生息域を拡大しています。水田や池では特定外来生物のウシガエルのほか、外来種のアメリカザリガニやスクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）などが見られます。

かつて水田や水路で普通に見ることができたメダカやホトケドジョウ、ヘイケボタルなどの身近な生きものは、極めて少なくなっています。

また、近年外来種のスマレ類の周辺で、以前には生息していなかったツマグロヒョウモンを多く見かけるようになりました。



タヌキ



ニホンイシガメ



ウシガエル



静岡市の農水産物紹介サイト「ZRATTO! しずおか」

「ZRATTO! しずおか（ズラッとしずおか）」は、静岡市特産の農水産物を幅広く紹介し、おいしい旬の情報をタイムリーに伝えるサイトです。お茶やみかんはもちろん、わさび、いちご、桜えび、しらすなど、おなじみの味覚のほか、静岡市の豊かな自然が育んだ、数多くの食材を網羅しています。



しりたがりかわせみ リーダー
（「しぜんたんけんてちょう」キャラクター）

これらの食材は、本市の豊かな自然環境によりもたらされる恵み（生態系サービス）によるものです。このような特産品を知ることも、生物多様性と生態系サービスの関連をもって、その恩恵のもと生活していることを理解し、行動する「生物多様性の主流化」を進めるための重要な取組です。

ZRATTO! しずおか

検索

都市地域(まちなか)

富士川河口域に接する蒲原地区から西端の用宗地区まで、J R 東海道線に沿う平野部を中心に市街地が広がっています。市街地は急峻な山地と近接していることが本市の大きな特徴ですが、丘陵の緑のほか、安倍川や興津川など身近に自然を感じることができる環境に恵まれています。

市街地の中には、谷津山、八幡山などの小丘陵や、賤機山や梶原山など背後の山地から細長く突き出した尾根※があります。有度山（日本平）は、都市部に位置する大規模な緑地として重要な役割を担っており、日本平・三保松原県立自然公園にも指定されています。この樹林地は、他の山地から切り離される形で存在し、また、周辺に田畑があまり見られないなど、一般の山間地域とは異なる特徴をもっています。



都市地域の緑



都市地域の公園や社寺などの樹木や池は、小規模ながらも生きものの貴重な生息地となっています。空地や荒地などでは、セイタカアワダチソウやオオアレチノギクなどの外来種に加え、最近ではナガミヒナゲシやヒメツルソバなどが広く繁茂しています。市街地近くの山では、近年竹林が猛威を振っています。

社寺の境内にはクスノキなどの巨木が数多く生育し、生育する巨木の数では、全国の市町村の中でもトップクラスにあります（自然環境保全基礎調査 全国巨樹・巨木林調査 環境庁 2000 年）。また、巨木の中には県や市の天然記念物に指定され、保護が図られているものもあります。



本覚寺の白壁とクスノキ
出典:「静岡市 HP」(静岡市)



主にカラスやスズメ、ムクドリ、アブラコウモリ（イエコウモリ）など、人間の生活域に適応した動物が生息しています。近年ではイソヒヨドリも多く見られるようになりました。また、山地に近い場所では、季節によっては様々な山野の鳥や昆虫などを見ることができます。



アブラコウモリ

水域※

■ 河川

市中央部西側には一級河川安倍川が、中河内川、藁科川、丸子川などと合流しながら、市域を北から南に貫いています。市の最北は一級河川大井川の上流域にあたり、東端の清水区蒲原地区は一級河川富士川下流域に接しています。また、市の東部には二級河川の興津川、中央部には巴川などが流れ、巴川は氾濫防止を目的に整備中である麻機遊水地や大谷川放水路にもつながっています。伏流水※や地下水も豊富で、安倍川の下流域や巴川上流域などでは湧水地帯が存在しています。



安倍川などの中下流域では、流路が絶えず変化するため、ヤナギ類やカワラヨモギなどの不安定な川原に代表される植物が見られます。カワラナデシコはかなり少なくなっています。

希少種としては、安倍川ではカワデシヤ、河口付近ではミクリも確認されています。門屋地区ではシヤク群落が確認されています。



大井川ではヤマトイワナやアマゴ、カジカ、安倍川や興津川ではアマゴやカジカ、巴川の最大支流長尾川ではアマゴなど、清流を好む種、中流域にはアユやオイカワ、ウグイ、伏流水が湧出するところにはホトケドジョウなども生息しています。また、藁科川の中流域にはナガレミミズハゼ、安倍川河口近くにはユウスイミミズハゼ、巴川上流域にはカワヨシノボリやホトケドジョウが生息するなど、希少な魚類の生息場所も存在しています。また、これらの川の下流域には、シマヨシノボリ、ヌマチチブなど多くのハゼ科魚類も生息しています。興津川や波多打川の河口には春になると、水が綺麗で、泥のたまらない場所でないと産卵できないシロウオが遡上してきます。一方、大井川上流では、本来当地に生息しないニッコウイワナの侵入が確認されています。

上中流域にはアカイシサンショウウオやヒダサンショウウオ、ハコネサンショウウオ、ナガレタゴガエル、カジカガエルなどの希少な両生類が生息しており、鳥類では中流域にヤマセミ、上流から中流域にカワガラスが生息しています。哺乳類では、上流域にカワネズミが生息しています。また、河川敷には、カワラケツメイを食草とするツマグロキチョウ、コマツナギを食草とするミヤマシジミなどの希少な昆虫類が生息しています。



図 18 静岡市の水系

出典：静岡市都市計画 ASP システムデータ
(静岡市)



アカイシサンショウウオ

■ 池沼・湿地

自然湖沼としてはくじらがいけ鯨ヶ池、べんてんいけ瀬名の弁天池などがあり、舟渡池や山原堤、上原堤、船越堤などは農業用のため池です。大井川上流の井川湖、はたなぎこ畑薙湖はダム湖です。

麻機地区では、遊水地整備と自然再生事業※が進行しています。再生された湿地では、アシやガマなどの湿生植物の中に、ミズアオイなどの希少な湿生植物が復活しています。

駿府城公園のお堀や公園の池は、身近な水域であり、これらの水域や湖沼は、市民の憩いの場、レクリエーションの場としても貴重です。



麻機遊水地では、ミズアオイ、ミズニラ、タコノアシ、カワヂシャ、オオアブノメ、ミクリなどの湿生植物をはじめとする希少な植物の生育が確認されています。



麻機遊水地では、ギンブナ、モツゴ、メダカなどが生息しています。近年ではカミツキガメなどの特定外来生物や、ミシシippアカミミガメ、ミナミイシガメ、ハナガメなどの外来種も確認されています。また、カワセミやカモ類、サギ類など多くの野鳥が生息するほか、チョウトンボなどのトンボ類やコムラサキなどのチョウ類も数多く生息しています。

鯨ヶ池、舟渡池には、以前はキトンボなど希少なトンボ類が生息していましたが、現在ではほとんど見ることができなくなっています。



ミズアオイ



ミシシippアカミミガメ

■ 河口部・干潟域

安倍川や富士川の河口部では、さす砂州※の発達により静水※域が形成されています。

巴川河口の折戸湾には、小規模な干潟や藻場が存在し、幼仔魚の生息場所として重要な役割を果たしています。



安倍川の河口部には、カワラヨモギなどの川原の植物に加え、シオクグ、ハマヒエガエリなどが見られ、浅い水域にはガマをはじめとした湿生植物や希少種のミクリが生育しています。



ミクリ



巴川の河口部には、ボラやスズキ、マハゼなどの沿岸性の魚類やシマハゼ、サツキハゼなど汽水※性の多くのハゼ類が見られます。砂礫地では、コアジサシやシロチドリなどが営巣し、静水域は、カモメ類・カモ類などの集団越冬地です。



ボラ

■ 沿岸・海洋域

駿河湾は、1,000m以上の深所が湾内の奥深くまで進入しており、海岸線からの海の斜面も急峻です。

清水港一帯は人工海岸ですが、他の海岸の多くは砂礫海岸です。著しい浸食作用や高波浪の被害を防ぐために離岸堤などが設置され、半自然海岸となっています。

砂嘴^{さし}*である三保半島は、海岸線に沿ってクロマツ林が続き、世界文化遺産富士山の構成資産にも登録され、遠く富士山を背景にした美しい海岸景観を呈しています。



砂嘴の三保半島や用宗には、植栽されたクロマツの防風林が生育しています。海岸には、ハマゴウ、コウボウムギ、ハマヒルガオなどの海浜植物が生育しています。



駿河湾内には1,300種以上の多様な魚類が生息しているといわれています。ミズウオ、ラブカといった中深海魚が捕獲されるなど、深く複雑な地形を反映して、他の地域では見られないような生きものも生息しています。主に三保海岸においてアカウミガメが上陸・産卵することがあり、平成22(2010)年には記録をとりはじめてから初めて大浜海岸でも上陸・産卵が確認されました。



アカウミガメ



人々の暮らしに寄り添う清流

本市には、日本有数の清流を保っている安倍川、藁科川、興津川が流れ、これらの清流は、人々の暮らしやすい生活環境を築き、自然と触れ合う憩いの場として親しまれるとともに多種多様な生きものを育む貴重な空間となっています。

中でも安倍川は、お茶やワサビ、アマゴのほか、様々な命を育む清流として名高く、平成の名水百選(平成20年)、清流ランキング日本一(平成22・23年)に選定され、国土交通省の「水質が最も良好な河川」にも何度も選ばれています。流域には公園や自然と親しむスポットも多く、趣味やスポーツ、憩いの場として愛されています。

この豊かな自然環境を将来へ受け継いでいくため、今後も、市民・企業・行政が一体となった保全活動を継続していくことが重要です。



しりたがりかわせみ ガールかわせみ
(「しぜんたんけんてちょう」キャラクター)



静岡市「清流30選」～夏の清流～
安倍川(梅ヶ島)
撮影:今村 誠之祐

2-3. 静岡市の生物多様性の課題

1) これまでの生物多様性地域戦略の評価

前地域戦略におけるリーディングプロジェクトの目標は概ね達成しました。具体的な成果として、南アルプスユネスコエコパーク※の登録や、麻機遊水地での保全活動の活性化などがあげられます。

また、いきもの散策マップの作成や、環境情報サイト「しぜんたんけんてちょう」の運営を継続して実施してきました。今後は、いきもの散策マップを使った生きものの調査の拡大や、「しぜんたんけんてちょう」を使った生きものの生息状況、環境学習教材、市民活動団体の活動内容等の情報提供など、より一層の活用が求められます。

一方、本市における市民の生物多様性への認知度は、全国と比較し9.7ポイント高く、前地域戦略の目標「生物多様性の考え方の普及と保全・再生への着手」に向け、一定の成果が見られました。しかし、認知は進んだものの、生物多様性や環境保全に向けた保全活動などへの新規参加は少なく、今後は興味や関心を持った市民の行動を引き起こす施策を展開していくことも必要です。

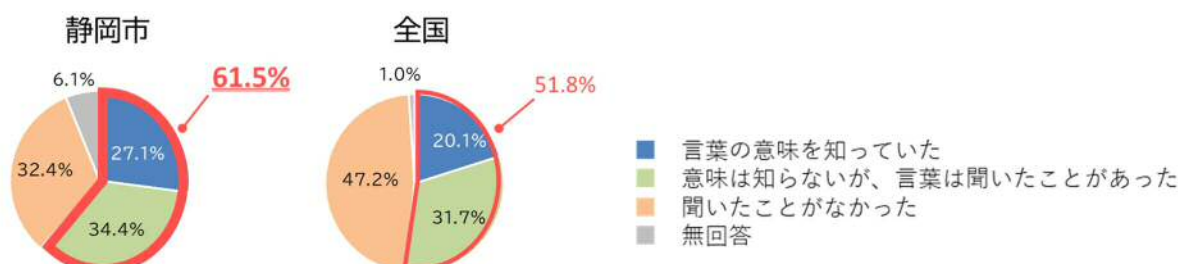


図19 市民意識調査結果

出典:「令和2年度静岡市市民意識調査」、「環境問題に関する世論調査(環境省:令和元年8月実施)」

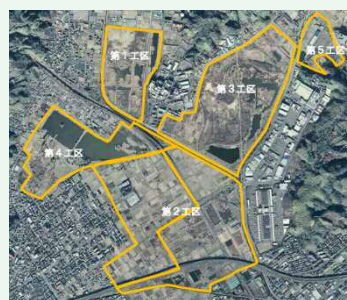


あさはた緑地(麻機遊水地第1工区)

麻機遊水地は、治水(防災)と公園等多様な側面を持ち、環境省の「日本の重要湿地500」に指定された自然豊かな湿原です。希少植物が再生し、数多くの野鳥が飛来するなど、生きものの貴重な生息・生育の場としても注目され、数多くの主体により、自然環境の保全、再生、活用に関する様々な活動が実施されてきました。

第1工区では、自然とふれあう体験型の都市緑地をテーマに「あさはた緑地」を整備し、あさはた緑地固有の自然及び麻機地区の原風景である農業に触れ、親しみ、遊び、学ぶ場を提供すること(ワイズユース)を基本理念に、皆さんが楽しめる空間を作り上げていきます。

(令和3年4月より全面供用開始)



麻機遊水地(各工区)



いきもの観察会

2)静岡市の生物多様性を取り巻く主な課題

①南アルプス地域の保全

地球温暖化による積雪量の減少により自然淘汰が緩和され、ニホンジカの個体数が増加しており、雪解けの早期化によりさらに分布域を広げています。増加したニホンジカの食害により、南アルプス特有の高山植物群落が減少するなど、ニホンジカの影響が深刻なものとなっています。

また、国内希少野生動物種に指定されているライチョウについては、引き続き生息調査を実施するとともに、関係機関と連携して保護対策に取り組むことが重要です。

さらに、登山者や車両による種子の持ち込みにより引き起こされる外来植物の侵入も懸念されることから、南アルプスの特異的な生態系の保全に向け、外来植物の対策に加え、継続的な動植物調査が必要となります。



ライチョウ

②里地里山の保全

里地里山の自然は、定期的に人の手が加わることで維持されてきましたが、過疎化や高齢化による担い手不足等により、耕作されない水田や畑、放置される二次林が増加しています。これまで二次林や農地などがモザイク状に交じり、多様な生態系を形成していた里地里山が荒廃し、生きものの個体数や種数の減少、希少種の減少など、その生態系にまで影響が及んでいます。

また、過密になった竹林の地下茎は弱く、枯死したものも含め浅根になる傾向もあるため、土砂崩れなどの災害の危険性が増す可能性があります。放任竹林の拡大は生物多様性の低下に加え、防災面での懸念もあることから、里地里山の維持管理を進める担い手の育成が重要です。



里地里山

③河川・海洋の保全

静岡市の前浜「しずまえ」で水揚げされる「しずまえ鮮魚」や、水揚量全国一を誇る冷凍マグロなど、私たちは海の恵みを受けています。一方、近年、海洋プラスチックごみが問題となっています。山や市街地で不適切に廃棄されたプラスチックごみは、川や水路によって流され、海へと下ります。そして海の生きものが誤食したり、紫外線等によって細かく砕かれマイクロプラスチック化し、回収されることなく長期間にわたり海中を漂います。これらは、海の生きものだけではなく、食物連鎖を通し、私たちにも影響を及ぼしかねません。

海の恵みを守るためにも、山・川・海のつながりを意識した取組の推進が必要です。



海岸に打ち上げられたごみ

④外来種の増加

近年本市では、アライグマ、カミツキガメ、セアカゴケグモ、ヒアリ、アルゼンチンアリ、オオキンケイギク等の特定外来生物が発見されています。外来種の生息域の拡大は、人体への危険や農作物への被害だけでなく、捕食や競合など在来種に及ぼす影響から、地域の生態系がかく乱されるおそれもあります。

ヒアリ、アルゼンチンアリについては、市内での発見後に関係機関との連携により、速やかに調査、駆除を実施し、地域根絶を果たしたように、早期かつ迅速な対応が必要となります。



カミツキガメ

⑤保全活動の担い手不足

里地里山などを管理する担い手の減少は、放任竹林の拡大につながり、その結果、周辺における動植物の生息種数の減少を引き起こしています。

高齢者でも働く人が増え、退職後の高齢世代が地域のボランティア活動や保全活動に参加する機会が減ったことから、保全活動等を実施している団体の多くは、後継者不足や構成員の減少により、団体の継続に危機感を持っています。現在活動している団体の支援に合わせ、団体間の情報共有や連携の場を提供し、計画的な放任竹林対策の検討や新たな担い手の育成が求められます。



竹破碎機の講習会

⑥自然と触れ合う機会の減少

市域の都市化や核家族化の進行、共働き世帯の増加により、子どもが自然と触れ合う機会が減少しています。

幼少期からの自然との触れ合いは、その後の自然や生きものへの愛着につながり、将来の主流化に向けて有効であるため、幼少期から日常的に自然や生きものに触れる機会を提供することが重要です。

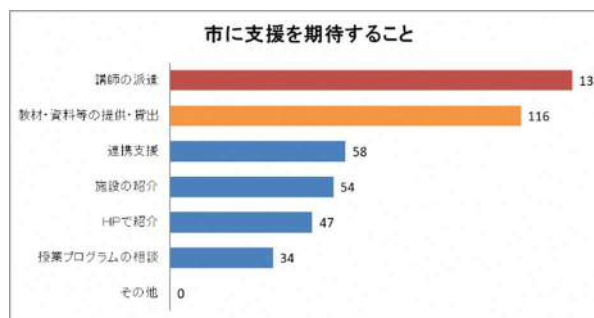


自然観察会

⑦環境教育の教材や情報不足

学校での環境教育を進めるためには、教員の時間的余裕や専門知識が求められることから、準備に必要な作業を効率化する情報や教材の整備、専門家の派遣等が有効と考えられます。

また、環境教育に関するイベントや団体の活動へより多くの参加者を募るため、市民活動団体や生涯学習施設等の教育関連施設との連携による情報の発信が必要です。



資料：静岡市「環境に関する授業の取組状況 アンケート調査」
(平成 29 年 12～1月)

⑧生きものの生息状況等の情報不足

本市では、特定外来生物に関する調査を継続的に実施しているものの、希少種や在来種を含む、地域における生きものの生息・生育状況調査が少なく、情報の蓄積が不足しています。このため、生物多様性の保全と、持続可能な利用に向け、動植物の調査、モニタリング、情報の収集と蓄積及び提供を実施する体制を構築する必要があります。



図 20 静岡市の生物多様性の課題まとめ

これらの課題は個別に引き起こされたものではなく、すべて人間の活動に起因している、あるいは人為的な影響を受けていることが共通しています。このため、市民、市民活動団体、学校、企業、行政のそれぞれの主体が生物多様性の重要性を十分に理解し、生物多様性の保全に向けた行動を引き起こし、各主体が連携しながら市内全域での取り組みを拡大することが重要です。

2-4. 地域戦略改定における考え方

地域戦略の改定にあたっては、前項で整理した課題等も踏まえ、次の考え方を基本とします。

■継続性

活動を増やし拡大するために、これまでの取組を引き続き実施することが必要です。

■進展性

自立した活動の次の段階として、活動主体間のつながりを生み出すことが必要です。

■新たな課題に対する対応

前地域戦略で残った課題のほか、社会変化等で新たに顕在化した課題に対する取組も必要です。

■将来への備え

今後の社会変化や、自然環境の変化にも柔軟に対応できる人材の育成に向けた教育等が必要です。

■SDGsの推進

「生態系サービス」を支える生物多様性を保全するための取組が、SDGsの目標達成に大きく寄与するものであることから、「生物多様性の主流化」をさらに浸透させる必要があります。